

# 河童の鼻とり

かっぱ

はな



登場人物

ナレーター

母河童

ははがっぱ

子河童

こがっぱ

河童地蔵

かっぱじぞう

じいさま

ばあさま

村人1

むらびと

村人2

むらびと

村人3

むらびと

馬

うま



1



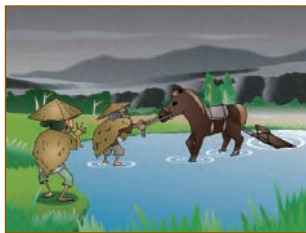
2



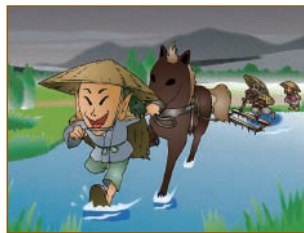
3



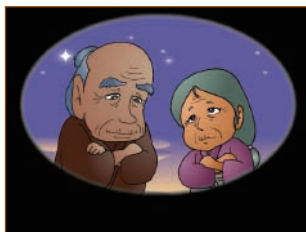
4



5



6



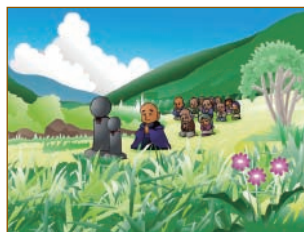
7



8



9



10



11



12



母河童

むかし、綾瀬村の早川というところに小高い山があり、小さな山城がありました。春には桜の花が咲き、秋にはもみじが真っ赤に色づいて、近くを流れる小川にはフナや鯉がのんびり泳いでいるのかな村でした。

ところが、その年は畑の作物が育たず、村の人達はとても困っていました。そんな時、近くのきゅうり畑にやせ細った河童の親子がやって来ました。

「ほら、坊やお腹が空いただろう。たんとお食べ」

と言って、やつと実ったきゅうりを食べさせてしまったのです。

子河童

「うん、おつかあ うまい うまいよお」

と、久し振りの食べ物にかぶりつくのでした。それを見つけた村人達は母親河童を捕まえてしまいました。

母河童

「どうかお許し下さい。食べる物がなくてつい悪さをしてしまいました」

村人1

「いや、許せねえ！ 俺達がやっと作った作物だ。許すことはなんねえ！」



全員

「そうだ、そうだ、許す事はなんねえ！」

と言って、母親河童の目をくり抜いてしまったのです。

その様子を物陰に隠れて見ていた子供の河童は、

子河童

「おっかあ、おっかあ」

と叫ぼうとしましたが、恐ろしさのあまり声にならず、二度と人間の前に姿を見せませんでした。

この事を、近くに住んでいた年老いた夫婦が哀れに思い、小川の近くに小さな河童地蔵を建て、朝な夕なお参りしていました。

そして、何年か過ぎた初夏の頃、老夫婦は空を見上げてはため息ばかりついていました。

じいさま

「ばあさんや、この分だと明日も雨は降りそうもねえなあ」

ばあさま

「そうだねえ、おじいさん。まったく、こうも雨が降らんと田んぼに水が入んねえから田植えができねえし困ったもんだ」

と、夕日が傾く西空をうらめしそうに見つめていました。

そんな時でも、おばあさんは忘れずに河童地蔵にお参りに行くの



でした。

ばあさま 「河童地藏さんや、お前さんにもお願いしても駄目だろうが、雨を降らしてくれんかのう」

とお願ひしていました。

それから何日かして、朝からかみなりがゴロゴロと鳴り、雨がざあざあ降って来ました。

おじいさん、おばあさんは、小踊りしながら外に飛び出し

じいさま 「おおー、これで田植えが出来るわい」

と言つて、大喜びで田植えの支度に取り掛りました。

おじいさんの家では、やせ細った馬を一つ飼っていました。

じいさま 「さあ、頑張つて働いておくれ。俺の所はお前が頼りだからなあ」

と、馬に話しかけながら田ならしを始めるのでした。

おばあさんは後から田植えをして行きました。しかし、馬の鼻先を取る者がいないので、なかなか真つ直ぐに前に進みません。

じいさま 「ほれほれ、前さ向いてしつかり歩けよおー よそ見しないで進む  
だぞう。ドウドウドウドーよ」



馬 「ヒヒーン、ヒヒーン」

その時、遠くの方から

小僧 「じいさま、おいらが馬の鼻先を取ってやろうか？」

と、声がしました。

じいさま 「ああーこの辺りでは見かけない子供だがどこの子だあ」

小僧 「この近くだよおー、おいらが手伝ってやるよー」

と言われ、顔を良く見ると大きな目が少しつり上がり、口も大きく

とがっついていて、おせいじにも可愛いとは言えない子供でした。

じいさま 「じゃあ、ちよつとばかり手伝ってもらうべか」

ばあさま 「おじいさん、どこの子供だがわからんが、だいぶん助かるねえ」

小僧 「じいさま、ほれ、おいらに手綱を貸して、じいさまは後からついてきな。さあ、ほれほれドウドウドウー」

馬 「ヒヒーン、ヒヒーン」

小さな子供に鼻先を取られた馬はよそ見もせず<sup>ま</sup>に真つ直ぐ<sup>す</sup>に歩くのでした。

じいさま 「えらい速いなあ、まるで空を飛ぶようだあ」



小僧 「じいさま、大丈夫かあー、疲れたら休むよー」

じいさま 「いいや、大丈夫だあー、足は軽いし何もしていないようだでえ」

じいさま 「本当に親切に有り難いことだなあ」

と言いながら、最後の田ならしにかかりました。

そして一番星が東の空に上がり、やっと田植えが終わる頃、子供の方を振り向くと今までいたはずの子供がいまません。

じいさま 「あれっ、ばあさんや、子供がいないのう」

じじばば 「おーい、おーい」

ばあさま 「本当に、お礼も言わんうちにいなくなってしまうって申し訳ないことだのう」

おばあさんは、早速家に帰って今日の事を河童地藏に話そうとして腰をかがめ、ふと地藏の足を見ると泥だらけ、驚いて

ばあさま 「おじいさん、早くこっちに来てみー、お地藏様の足がー」

じいさま 「お地藏様の足がどうしたんだあー」

よく見ると足だけではなく、顔や体中泥だらけでした。

じいさま 「何ということやら、誰がこんな悪さをするだべ？今、きれいにし



てやるからなあ」

そう言って、おばあさんと二人で元もとどおりのきれいになった河童地蔵の顔を見てびっくり！

ばあさま 「あれっ、おじいさん、この顔どこかで見たような」

じいさま 「なに言うだ！毎日見ているだべえ」

ばあさま 「ちげえよ、ほれほれ、今日、助けてくれた子供の顔に」

じいさま 「本当だあ！今日の子供にちげえねえ。俺達おらたちを助けてくれただなあ

ー、ありがたや、ありがたや」

二人はすぐこの事を村人に話しました。村人達は河童に悪い事をしたと後悔こうかいして、早速さっそく、お坊さんと呼んで供養くようしてもらいました。このことがあってから、この河童地蔵に大勢おおぜいの人々がお参りまいに来るようになり村はにぎやかになりました。

そしていつの日か、可哀想かわいそうな河童親子のことを忘れないようにと、近くを流れる小川の名前を、河童の目をくり抜ぬいてしまったことから目久尻川めくじりがわと名付けたそうな。







今では目久尻川添いに河童の像が三体、座つたり、寝転んだりしながら楽しそうにお話しています。山城は城山公園となり、ふもとの湧き水近くには、夏になると蛍が飛び交う、いこいの場所となりました。

(注一) 田ならし  
…田植えがしやすいように土を耕した後を平らにならすこと。